



門 凡 2
號 3115
卷 1

早稲田大學圖書館
昭和 28.9.22
藏 書



松長 日記之序書

家圃 松子もめあやしき人の玉ふた

よひしきさあまのしにち紙みつも又身みつ
かるさういかに油り来りしものもあなる
其人の見物来る事と公集あたるゆ
らうこれのれせは廣く傳りたるとあや
わづし記ふとむしとてさうさうの
ぞ多の年月はさるきほのせめをとらる

くは——も——き 荒海あらかみのい——あ——
波風なみかぜよき——ひか海うみと忍しのり——か——
きん——あきひ海うみ——のひか——
んる波なみれき海うみと——き——
る——とらめくあきひ——色いろぬ——と——河玉かぎたま
きぬ——あきあき海うみと尾張おとぎの玉たまれ人ひとを流ながす
ふゆのよ出合いであひ——りさるる——新伊豆あたらしくしず玉たまも
子浦こほらといふふよ——海風うみかぜよつひて構かまも

あられ帆ほ——らとさ入いりて——何なにもぬふ吹ふきぬ
りて——とを余あまり又また月つきの福ふくい——もきぬ大海あたらしくうみの汗あせよ
た——ひ居いて——ら——人ひとの玉たまれよ——物ものけられ
をき玉たま——ととらてみきと流ながす海郷うみさと——海うみ
来きりりるよの幸さい月つきのうき——つ——きぬ
かせあ——とす——かあや——ちり——
ふ——い——大おほい——れ海うみみふ——
あ——とら——とあ——

さくらと十七日とくはるいづこもあはれ
大洋ふたよひうき長る福めくもいづれ
しきたんしちるもいづれ今時ていふはら
きもははくふちんそんそんあか
かこめ世よひあはれあはれよふいづれ
ゆとあつると漢もていふ世よひりあはれ
うき身はをくむもあはれりよとあはれ
ふれなごうむいづれとまといづれ
吹流さきた

るより一人をこれあはれとまといづれ
ていづれあはれいづれあはれとまといづれ
あはれ大言れいづれあはれとまといづれ
りあはれいづれあはれとまといづれ
らりあはれいづれあはれとまといづれ
あはれとまといづれあはれとまといづれ
あはれとまといづれあはれとまといづれ
あはれとまといづれあはれとまといづれ
あはれとまといづれあはれとまといづれ
あはれとまといづれあはれとまといづれ

附ていふ

一 概 公このまよいふいふのまよはらん正——たる所ところいたうたうど
帝みかど者もの者もの諸しよの出いるまよはらん向むかひあめりか法ほうももるめ
たまはハ、若わ者ものも、たが——たる事こともある、強たけくあひ
あやまれ、事ことも、有ある——又また、事ことも、あひある
所ところも、あひある——さよハ、人ひとのまよはらん、たうたう
あとのあめを——はる、ほも、多おほうる——
チシバンといひ、ゆる、と、イ、ス、ハ、シ、ヤ、と、ヒ、カ、ム、テ、ヤ、ウ、カ、と、ヒ

うらとカムサスカと云うるるとい誰も耳を
ある玉の石なるう紙よ書つゝあつてもせ
るり彼玉のと系とを國の福といひつても
るもいゝたのむあまは善使といふ紙も
夢さうらう事も有るはるのいふのさ
たどらうとさう考へ改ちなるらん
中く物さうをあらんとするおは彼ら
出記して改ち正すらん

一中の画景とあはす事とも多かれと主を
いふも繪と公あるものあらんといふ
あまをそとせしめしとせしめしと
して字もすべ紙むもよする公あらん
あま今押さるるは志して相せんといふ
それと繪とと海とと海とといふも
な一紙とを海とと海とといふも
よめせしめ彼らとせしめしと

あつてそれと思やつたしつてそのを
らして事少くもあつてせんやれとさう
と。しつてねんせんはくちつてやめたし
かれつ折つたる衣後袋物杯の志つて見
あるよのよとちつて契よ世つて

一 尊者曰今れ世よらんや若とつて

物つてもつてつて人よあつてつてつて
つれつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつて

何なに〜ふらんか〜嘉よし〜あ日あひせて福ふくひしふ
 うんやと云いひりあふ廣ひろき世界せかいの事こと也なりと云いひ
 いたしと云いひ乃のみは妻つまあま洋やうの人ひとのあらゆる
 物ものもあらずとも心こころをいひてあはれゆ〜西洋せいやう
 の人ひとのいふ話ことばと云いひ世よ〜云いひりあはれり佛ぶつを
 曆れき表ひょう編へんよと云いひあはれり〜人ひとれあひいちと云いひ
 あとつといつと云いひ語ことば〜何なに世よと云いひ何なに事ことと云いひ
 たとつと云いひ乃のみと云いひ乃のみと云いひ人ひとよ自分じぶんと云いひ
 とも又またと云いひと見みてあはれり〜人ひとのいふこと
 りのこれい重ちゆう者しやが語ことばり出でる事ことと云いひ乃のみは世よの
 あらゆる事こと中なか〜は後のちの考かんふも成なるゆと云いひ
 有あらんか〜と云いひと云いひ乃のみは世よの事こと也なりと云いひ
 あらゆる事ことと云いひ〜と云いひはちん
 一ひと重ちゆう者しや古ふるにふゆりて後のちの事ことも〜重ちゆう小せう云いひ
 一ひと重ちゆう者しやが己おのれが欲よくと云いひ十じゅう式しき人ひとれ考かんふと云いひ
 一ひと重ちゆう者しやの事こと也なりと云いひ乃のみは世よの事こと也なり
 一ひと重ちゆう者しやの事こと也なりと云いひ乃のみは世よの事こと也なり

身とまろくちやむるなまにまろくちまろくち
海に沖れ標とをぬく感する海よらん

一いぬめあつてまよふまよふまよふまよふまよふ
やるとぬむ人れぬくまろくちまろくちまろくち

ふいづるまろくちまろくちまろくちまろくちまろくち
語りとまろくちまろくちまろくちまろくちまろくち

まろくちまろくちまろくちまろくちまろくち
まろくちまろくちまろくちまろくちまろくち

ふいづるまろくちまろくちまろくちまろくちまろくち

まろくちまろくちまろくちまろくちまろくち
まろくちまろくちまろくちまろくちまろくち

まろくちまろくちまろくちまろくちまろくち

船長日記之巻

尾張名護屋網屋町小崎屋松右衛門 船子御百石積

小舟督系丸船長重吉

長右衛門 といふい船長船長の通り名なり

板の箱鍍をこれと小い松右衛門と認めん

出づるなりこの時せんさうさうなるなり

重吉飯船長よあのみまじしころなり

一同不知多勢半回村の百姓とて宗吉

門流少く十五日後時より船のりよなり

あるちり

船縁三節^{しほのきり}楫五^{しし}友^{とも}物^{もの}その^{その}日^ひ水^{みづ}を^をか^かし^して^て放^{はな}た^たす

十日人^{ひと}系^{けい}組^{ぐみ}と^と文化^{ぶんか}十年^{じゅうねん}五月^{ごがつ}尾^お洲^{しゅう}米^{まい}その^{その}外^{ほか}

諸^{しよ}高^{たか}船^{ふね}と^とは^はみ^みの^の道^{みち}同^{どう}本^{ほん}所^{しょ}流^{りゅう}と^と出^で帆^ふ一^{いつ}戸^こり

舟^{ふね}の^の尾^お洲^{しゅう}北^{きた}米^{まい}と^と納^なめ^めその^{その}日^ひ橋^{はし}新^{あらた}田^{でん}賞^{しょう}楫^し

の^の同^{どう}月^{げつ}下旬^{しんげん}江戸^{えど}お^お帆^ふ丈^{ぢやう}を^をり^り俣^ひ豆^{まめ}五^ご子^こ浦^{うら}り

め^めの^の指^{さし}お^お月^{つき}四^よ日^{にち}よ^よ子^こ浦^{うら}と^と出^で帆^ふ尾^お洲^{しゅう}よ^よ遊^{あそ}ん

己^みの^の時^{とき}を^をめ^めり^りよ^よみ^みち^ちと^と出^で見^み実^{まこと}風^{かぜ}よ^よて^てあ^あら^らり

を^を門^{かど}山^{やま}前^{まへ}海^{うみ}や^や二^に十^{じゅう}里^りの^のふ^ふ十^{じゅう}里^りを^をめ^めり^りを^をせ^せ也^や也^や也^や

夜^よよ^より^り浪^{なみ}舟^{ふね}よ^よ雨^{あめ}風^{かぜ}を^をか^かけ^けて^てな^なり^りあ^あれ^れの^の帆^ふ

と^と下^{くだ}さん^{さん}と^とあ^あり^り水^{みづ}を^をか^かき^きて^て立^たち^ちわ^わぐ^ぐ海^{うみ}を^をか^かき^きて^てあ^あら^らり

北^{きた}門^{かど}山^{やま}前^{まへ}海^{うみ}や^や二^に十^{じゅう}里^りの^のふ^ふ十^{じゅう}里^りを^をめ^めり^りを^をせ^せ也^や也^や也^や

海^{うみ}中^{なかつ}に^に船^{ふね}を^をか^かき^きて^てあ^あら^らり

を^をれ^れの^の帆^ふを^をか^かき^きて^てあ^あら^らり

想^{そう}して^{して}船^{ふね}中^{なかつ}より^{より}人^{ひと}の^の影^{かげ}を^をか^かき^きて^てあ^あら^らり

想^{そう}して^{して}船^{ふね}中^{なかつ}より^{より}人^{ひと}の^の影^{かげ}を^をか^かき^きて^てあ^あら^らり

小舟い志きしつさゆに管あそも板
もむりふゆとあそぶみそれよに付也
てこれと目平と一舟とこの所す

し来りてたつ縁るよん出しつるさ
牌とつとて取つて引よるちり
とも志れさる時舟と控あつる

小舟其船船小舟付し
りそ何事とせんい希なる事なる

船舟と控れを後につけらるるゆなれ

も大船風の事なるいさるさるいさる

ゆらゆらと

ゆらゆらと

ゆらゆらと

ゆらゆらと

取られぬ紙は浦くれば清き紙なり

想して吳の船系は美玉に地理より

く藤石と天文ととつて美事とすの利

初白事あると竹の船系はすのり

志は氏何事にも紙袋とつて古神玉の

神軸と細ひくくつとほめるなり具紙

くどとくは一種ますすよ米と八合紙は

紙と一寸は百小切てあり事と云付

丸ちりそのとふあきぬる神玉と紙んじ

二百交れ以後とよのよふかうせは丸ちり紙の

用一ツとびあめめてその以後付なり文紙

えて志るゆかりこの中法もいさう遠く

るゆかりこれ目なれ船系は古神玉に

神鏡のよめてるゆかりのつらう年を

い是とんて神玉のゆかりさるゆかり

るゆかりとすのり

其夜の廻れ時まわりのときまわりのよいしに晴はらしくも心志こころざしを
せりまううらり停とどめれみちをみちと追おひみ里さとるるれれのの路みち
く大おほく又また収おさむ見みえりみちをみちと入いれ火ひとえせよと
能よ

雷かみなり夜よは湊みなとよを付つく時とき方角かたがけ志こころざしされは
見みえ又また湊みなと入いれゆとんせの久ひさしとち神かみ一ひとみ紙し
祈いのち急いそしく目めと到いたるもゆいその湊みなとの方角かたがけ
よ必かならずと火ひニツツつんゆらうらうやそ磁じ石いしと

あや方角かたがけと定さだめ終おれい忽たちち火ひの湊みなと
なり見みえたよゆくの火ひとるる地ち

角かどの方かたがけよ火ひとるるれい祈いのちつは磁じ石いしとて方角かたがけ
とつるくともゆい成なる方かたがけと入いれまよとく
烈はげしく吹ふけのりる幸あきふくして停とどめれ湊みなとを
く追お来きりゆると又また流ながれ吹ふくともゆい又また湊みなとを
吹ふく大おほく志こころざしけれ俄たちち又また成なるよ替かりしと追おひま
らいて浪なみの介まが高たかく荒あれ立たち来きりてあらい左ひだり成な

家ぬらう河ひ川城のやうなる大派をさうさき
志しきるせんうらう帆柱一舟あはる
風ふてあなみの中と吹しこれ望む日夜
咽る涙ふせん人と落しうらう出たり誇れあはる
近來りぬ都る凡ぬ十里うらう二村乃るふ物き
とぞそれうらう要なる落しうらう所をきい後日の
云次小舟船と控んと落しうらう重なる橋船
あはるうらうくた渡入るうらうせんはるし
控りうらううらううらううらううらううらううらう
控んと云はるうらううらううらううらううらううらう
と控りうらう板面ちやみおれと風を舟船うらう
うらううらううらううらううらううらううらううらう
ろこうらううらううらううらううらううらううらううらう
み里うらううらううらううらううらううらううらううらう
と楫とあはるうらううらううらううらううらううらううらう
とあはるむらううらううらううらううらううらううらううらう

ら
切よ

楫 六尺とせり 此楫の本とせり

さつは 楫なるれば 十六年とせり

何れの楫に 十年位なり 楫ハソと云ふ本

又ハ切しなり 板帆柱と切しハ兼テ 船中

又ハ切用意ハ 切しハ兼テ 船中

あつり 友音より 切しハ兼テ 船中

も 切れいたるなり 切しハ兼テ 船中

風下 切しハ兼テ 船中

冬と 切しハ兼テ 船中

垣換 切しハ兼テ 船中

以て 切しハ兼テ 船中

あつり 切しハ兼テ 船中

今よ 切しハ兼テ 船中

成後 切しハ兼テ 船中

切し 切しハ兼テ 船中

切し 切しハ兼テ 船中

豊さ母は傷れい船換はるるなり

大風大浪よりまれく是擲してびつ切ていさ

ら海に切らんまれい折傷はしそむ目れ船底の

時より小切をしち来の時をめぐり又幸や

切傷しそむまらるるもた割く大浪と折せ

むと折ると折るるなり

大船のありとろろそ船の底より浪絶

しとろろおの浪より折れし横木と二人と

ふあいのまの上よりし船より小口成るなり

海に流まゆら船は仕りけしるるなり

折て今い帆もろく帆柱もろく櫓船もろれ

そ唯浪風は但せくいつくし海にまれん事

もあんと運は海にまらるるなり

ふりまんと船しるるなり

時より大浪と折せむさ浪の岸に大船と折

て急流と折れ今も水船と折れんと

生くる世に在るうりりり伊豆此宮ありあも
物も舟とせんとせれも何とこしあもあ
志げなれいふ縁とせんとせりしはあ
のこえ引けおく船の治ありしはあ
流連り皆くくるま度ふ居く念佛と唱る
りりおちせんまぶもあ

なかり船の上よい心長とふきあれいと
志しき大なるい船の上と紙り紙り
中くく知くくもあもあ
の船の中へ船へ舟中む付は垣のまきいも
探りもあらうらうらあうらうら
あう紙く縁いさうぬを

又しそむくちるもあ又舟と来る舟と
是の舟と大なるとあもあて急佛と舟と
船へへ遊りりあもあて舟と舟と舟と
るりあて舟と舟と舟と舟と舟と舟と

伊豆の七海と新島とのあはれと流る船る凡

十七八町中りもあはれと新島のあはれと

凡百尋中りめあはれと新島のあはれと

之百尋中りめあはれと新島のあはれと

そめは船と引中りと流る船る六日此船り

ありて之宛船のあはれと流る船る

之宛船り江戸凡百尋中りめあはれと

きとる船れ船れ船れ船れ船れ船れ船れ

られよ船と知れせんりあはれと

と揮の先へ船の先へ船の先へ船の先へ

海人はとる船りあはれと流る船る

風大あみあはれと流る船る

叶えんあはれと流る船る

ありあはれと流る船る

船り出り七日と流る船る

也探りあはれと流る船る

八日船成る也

方よあつて日奉れ山ももろんうとらうり
とくしと名後あて支なり
山音よ山の得もえん
皆くしと公海くさうて泣きう介執事いなし
被録三節ハ口十二三葉より成りたる山と見出し
てより出たよるる船以まをい船の中みふ一燈と
しやふん院一あり
船中まあり 徳石の針と之日記と
附る凡何ま一乃方角一哉何流凡切とふふと
記と

船中の院火の物音がなるのやうは辨めて
くしとととらうしと極まふ心うとむきと
あがめあはるまらうしとらわたり
初て皆くしと極くり一歳目明ても書ても
かろうも書くみよ塩と終ふハ大奥の御食と
なさんちり一回は首くらうて死るといふ
重者とてやうしとやう死ね事いしとよも死な
まらるるなり今迄塩とび来りしれハ今迄

あんなにうらやまのやいあつとつらまはつらまも実もそそ
風乃

あまねるやいあつとつらまはつらまも実もそそ

又念佛れみあて日と送り九日は秋大風やま

十日の合段大権現の心算目するうとそそ

旅籠とそそ一はよ金比と新巻とらまよ乙

あまねるやいあつとつらまはつらまも実もそそ

船のあつとつらまはつらまも実もそそ

末の付次述船のあつとつらまはつらまも実もそそ

あまねるやいあつとつらまはつらまも実もそそ

あまねるやいあつとつらまはつらまも実もそそ

あまねるやいあつとつらまはつらまも実もそそ

あまねるやいあつとつらまはつらまも実もそそ

あまねるやいあつとつらまはつらまも実もそそ

八丈崎江戸より七十里とそそ

八丈崎江戸より七十里とそそ

されど何者も海にまゝさうりりれい又紙籠と申
 らく十二支と云付八丈島を何者よ南と申す
 とはげ初めと云て籠の付方と云
 きえれい西宮の方との出若るうよ舟の風い
 未申れぬう吹れい屋がしあるまううと云
 帆と巻て港へいさるをりり何者も海にま
 くと又八丈島のうの島のり紙籠と申す
 百里返り籠と入て又四十里と出れい港へ
 大よ船ひたとく船にうくも海にまゝいとい
 とふんといさりいその支度といて今やいと
 待取よ翌十三日夜明て見渡せともをさあてり
 小島ひつと云又籠と云よ一ツもあがぬ船を
 けりていとい又百里うり百十石といり
 二百里返りい何よ百二十里と申す又八十里
 沖小引にたされい船に八丈島南に
 百里返りい沖をりりりる船よ又も成

其北より大風吹起りて大波立ちくるり細乃
船中一同ちあつと落し一固き強く重衣

又竈を揺ぐ船内風あつ帆と巻く走んや
又い船と横小流してあつ海を叩く何んや
流してあつと出たれ帆を下して流し

あき十四日も於大風あつ又く一雨よりのぬ
し多佛唱ふるるりかや一十六日も大
風あつふりあつ流しひ日あつ海はあつ及ん

氏の神八樓あつあつ人目あつれはとくみあつ
派難と新氣あつ時く何くとも知れあつ青き香
二相あつこれハあつやあつ神あつあつ出現

あふんとあつあつあつあつあつあつあつあつ
又已れ時あつあつあつあつあつあつあつあつ
とあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

世後あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あそ 青き鳥枕殿より来りて事いなる一書ありと云し
皆一信を肝小沼にて神の心恵と云ふ
十六日又舟り風ありきりありまき又舟り八丈
崎より五百里南より依りて重吉崎より白ひ
いあやう八丈崎と云ふくまをれくまバ船より若
船より好む一舟よりい波龍一合ハ是悟らん
いあやうかりあるとて来年近の食地と云ふ
よせり船ありきいあやう米い六斗八合依り
下いなる一書ありと云ふ外用をよめらひあきあり
と十三人の割合後よりまき人あり三斗八合依り
ていなる一書あり七百依りては豆と云ふと粉よ
くまき米と云ふ一書ありて食物とせんて定め
あり十七日よはありと云ふなりと云ふはまき
と云ふ一書ありと云ふと云ふ一書ありと云ふ
と波と云ふ一書ありと云ふと云ふ一書あり
穴と云ふ一書ありと云ふ一書ありと云ふ一書あり

あそ 青き鳥枕殿より来りて事いなる一書ありと云し
皆一信を肝小沼にて神の心恵と云ふ
十六日又舟り風ありきりありまき又舟り八丈
崎より五百里南より依りて重吉崎より白ひ
いあやう八丈崎と云ふくまをれくまバ船より若
船より好む一舟よりい波龍一合ハ是悟らん
いあやうかりあるとて来年近の食地と云ふ
よせり船ありきいあやう米い六斗八合依り
下いなる一書ありと云ふ外用をよめらひあきあり
と十三人の割合後よりまき人あり三斗八合依り
ていなる一書あり七百依りては豆と云ふと粉よ
くまき米と云ふ一書ありて食物とせんて定め
あり十七日よはありと云ふなりと云ふはまき
と云ふ一書ありと云ふと云ふ一書ありと云ふ
と波と云ふ一書ありと云ふと云ふ一書あり
穴と云ふ一書ありと云ふ一書ありと云ふ一書あり

銀糸ぎんいととよりのよい有るきたとい古たも銀糸ぎんいととよ

進も首くびと繩つなと附つるも物ものといかたはかきよめ

おまぬ時とき人ひとの門かどはとてきりぬるもけやると

きりぬるもけやるといおももれ物ものといふのみと

一いちと重おもなるもそとあもしげと玉たま汗あせと

いあか一大いちだなるも新あらたなるもかきよめとまを来き年ねん

八はち八はち夜やもよも八はち丈ぢょう形がたの出い儀ぎりいのぬ

まの儀ぎ傳つたはげやと八はち丈ぢょう形がたは尋たづてもぬれとまを

共とも時ときといくさうと一いちと物ものなるもと先ま丈ぢょうとい

法ほう變へんとんころとていそれとたのいあき鳥とり

の鳴なすいとつてききえをるつり神かみは佛ぶつは新あらた変へんと

的あけい書しよ読よむのふとものいり安やすとて書かとてい

い飛とびいりれと春はるの必かなずい南みな風かぜの吹うきまるなるは氣きと

丈ぢょう丈ぢょうは持もちくなるゆもゆとて春はるの古こ々ま吹ふき

されん朝あさを傳つたへ丈ぢょうといちめしは紫むらけをしに換かへ

くまとも云い倫りんせとさうあといあともさうと

境へも隠りたり新く日を強きまゝ
菊もそふれい船中ふ所のは是とに
日く小折碑も菊よはらりよ後みは
ついで船のあや一は成折ぐり菊よ
我身とまむ心体し心細きゆらん
日く新くよ波と定めありと波菊と
夏とつらん引とたがいは代り合へ
有り重きハ口託と記しこれ一境

とみろこれ氣と引立子卒百苦
河へ一板船中一回明言大波よ攻
急佛唱へ強き河をそ首れて今
ろくも互よ合せり突めありと
何おの浦へ折とつとも一群乃
中やうよ絶もつあき合せ首ら
我と山重きあやいありとも絶
好く海可飛入ん塔ひるまはつ

一うを八回意し〜〜〜〜〜と云々

青の袖は彼白き多青き多影れ来り彼を

初〜〜と云々〜ハカと云々〜伏伴み

す〜死ね〜事も歩〜成〜

と〜無〜後も今ハ〜止〜

す〜多〜あ〜これ出〜ハ〜

ち〜〜若月一むいハ〜

四日此夜雨降〜〜〜

生風の吹サ〜〜〜

よ〜あ〜ぬ〜ま〜ひ〜と〜

又波風起れハ多佛唱〜

湖〜〜〜ハ〜

二人三人〜

り〜され〜も〜

色〜色〜

片〜

片〜

知るおもる事ハ世このハ糸及リ来りし
なん米もろくもろく其と成りよき
海へ取捨せし命の法くづきやいさし
いせりし事もあはれとて迷ひ紙を
後の世の切徳ともなりし事とて
綴り割後しあきふ西の米とて
大なる除穀めりしとて百百遍と
約夕百百遍とくく者も米とて
百百遍んとくく米もよき
まゝとて控とてちりちり
うくと百百遍んとくくも
あり内も米とてくく傳りて
おのそ人出来りし屋をめぐり
る。朝夕の念佛読経ハ
又一まゝ水と茶とん
いさし海へ落し死し
いさし海へ落し死し

波風新し来りて又も大波を歩込と歩込と歩込と
死ぬる時とありて付いひて歩込と歩込と歩込と
唱へ周章落すちみ風静まれい又野目おぼ
ぬりよりの

皆く兼て今令て又も大波歩込て今い
是近と思ふ付りて元く潮起死せん
一あひよ首とらりて死はくは通連
其用意と一室くはよ世百百遍巻落つ

小あつる縄は色どきてあつるよ成れぬ
是すその縄とあつるく是くはさつるよ
首おつる縄とありてあつるよ彼縄お
て帰とあつるく是い誰う縄是い某のよ
福とあつるよ何とあつるよ目よ付て心細
つふいそれぬあつるよ一竹くはあつるよ
是近も十六交一ふよ首とらつるよ
おくも皆くはあつるよあつるよあつるよ

と流しつゝあひのちを碁と繩も斬らうと
もぐさぶる事をもとむに傳はる利し
語り

初なる種よ米いづこころの豆をとりてらへ
ら紀ききこれやうなるものみよそ命とつら
とやう〜大晦日はなうりればなまを
き候はふいそ〜冬は一日と散らう
るまはな南の風吹事なれに種を古た

〜も海〜目か友候の〜志免歸りとし

正月の他はといとるむ〜舟中よある
ゆのと新集や〜ねむりのさゆふらる〜
掘く境際ふい豆とるまよめ〜死生は豆
れ粉と香子か〜て流るふてゆき西酒の登
いあるりそれ〜と割と〜掘くさせ申
時牙りよ出来よ〜て扱其志や歸りと見
皆〜一交よ後おと〜新集よ〜

後さうしやとすて又例のり備あやまど先
りんと思ひ出で思れい皆く至るよ向ひて
りおやう例ハ杉木焼小枝の折しうとさよと
場ハ神及法傳よありて酒よ酔解よあき
富考れ人も同然るるよ世よ依といひあてうら
よ思ひ傳へん又古々も世よ例よ遠よ
てさうとも後るあきあき向くあかん
一目如と情ハ人悦まうぶ至るよ心よ
親ハい思あうり喜ハ必ぞ悦んくやと古々
御さぶ喜れ初らるれハ元日よ喜あまて居
あかめ尺とさる事さる事又ハ折古々
ういいうりも雑煮も折るるよ喜あま
おもさるぬきと折るるよあま
う折るよ折る事傳へんと喜折く至るよ又これ
こそ兼て用意あまハ一日ハ喜あま
あかめり茶の内紙御折ハあまハ一日と

米^{こめ}と^と書^かく^はべ^ー一^い是^{こゝ}米^{こめ}年^{ねん}ハ^ハ米^{こめ}と^と冷^{ひや}べ^きま^よ
伸^の者^{もの}也^{なり}有^あり^と多^た段^{だん}時^{とき}て^て乞^こ目^めハ^ハ米^{こめ}の^のと^とし^して^て
ふ^ふち^ちぶ^ぶそ^それ^れと^と娘^{むすめ}一^いつ^つ傳^{つた}ま^まし^して^てや^やり^り
歎^{なげ}き^きと^とも^もと^と免^{めん}せ^せる^る也^{なり}

惣^{そう}一^いつ^つ船^{ふね}系^{けい}の^の乞^こ目^め也^{なり}作^{つく}法^{ぽう}ハ^ハい^いち^ちり^りき^き
事^{こと}する^る古^こ々^々よ^よあ^あり^りて^ても^も何^{なに}出^いの^の隣^{となり}よ^より^り
て^ても^も回^{まわ}り^りて^ても^も乞^こ目^めハ^ハ米^{こめ}の^のと^とし^して^て
中^{ちゆう}一^い面^{めん}一^い概^{がい}と^との^のげ^げ船^{ふね}民^{たみ}ハ^ハ信^{しん}佛^{ぶつ}指^{さし}振^びの^の衣^い

類^{るい}相^{さう}織^しと^とる^る一^いつ^つ種^{しゆ}類^{るい}又^{また}は^は伸^の者^{もの}也^{なり}
概^{がい}と^とる^る所^{ところ}ハ^ハ伸^の者^{もの}也^{なり}水^{みづ}色^{いろ}と^と引^ひ連^{れん}て^て
表^{あは}へ^へ出^いる^る方^{かた}ハ^ハ伸^の者^{もの}也^{なり}向^{むか}ひ^ひの^の方^{かた}と^とし^して^て
げ^げて^てと^とも^もふ^ふく^くり^りこ^この^の如^{ごと}く^くと^とし^して^て概^{がい}と^とし^して^て

引^ひと^とあ^あり^り表^{あは}へ^へ伸^の者^{もの}也^{なり}又^{また}は^は伸^の者^{もの}也^{なり}
三^{さん}交^{こう}ハ^ハ水^{みづ}色^{いろ}一^い回^{かい}よ^よま^ます^すと^とし^して^て
乞^こ目^めハ^ハ伸^の者^{もの}也^{なり}又^{また}は^は伸^の者^{もの}也^{なり}
乞^こ目^めハ^ハ伸^の者^{もの}也^{なり}又^{また}は^は伸^の者^{もの}也^{なり}

乞^こ目^めハ^ハ伸^の者^{もの}也^{なり}又^{また}は^は伸^の者^{もの}也^{なり}
乞^こ目^めハ^ハ伸^の者^{もの}也^{なり}又^{また}は^は伸^の者^{もの}也^{なり}
乞^こ目^めハ^ハ伸^の者^{もの}也^{なり}又^{また}は^は伸^の者^{もの}也^{なり}
乞^こ目^めハ^ハ伸^の者^{もの}也^{なり}又^{また}は^は伸^の者^{もの}也^{なり}

つと又善妙ははとらもるるに一度相今此概とらひ
 とら村大勢一回よんさのらんととて船とと
 人ととら手控一回と借権成天氣なゆと
 互よらて候びとらんをさるよめしよ
 雜質とあへてとあき控て下へあつてはあ
 とまの神おとと相代船尻へ向ひ祝文
 とらま一と回兼船へ吸物振出り船尻
 昼ともとてて候よ末度へとと末度の
 人さすのてのまあすりせりととて又出舟小
 と度へ晝との月ひあり相雑質出一回と祝
 ひ終りて陸へとら神乘りより控へ船
 とは祝の中候出り終りて年俵のれり
 出うけりるるる楊形り一船と一船へ
 此と相りてとと村容易に善なるは
 候とら候つてとととととととととととと
 此と此と何列何約の誰船船船船

人さすのてのまあすりせりととて又出舟小
 と度へ晝との月ひあり相雑質出一回と祝
 ひ終りて陸へとら神乘りより控へ船
 とは祝の中候出り終りて年俵のれり
 出うけりるるる楊形り一船と一船へ
 此と相りてとと村容易に善なるは
 候とら候つてとととととととととととと
 此と此と何列何約の誰船船船船

四乳中事と詞を改めらるべきと改め
その善くしてふまの世に金浪山の好
行くとて若菜子傳も其の好
くはると大なるよとて
あまことと時永日候
るるるり年若きか
もし色を重くする
の五事取るの其事とあひか

漢るの記さ由と新あり
叔文化十一年戊申正月八日あり
轉りよ法と御蔵と
筆書とが
や今表その作法終りて下り來り目出
交差事と
ふいふ書れ村の事
生て家苑うらも知まぬ歌の中此事あれ

い誰^{たれ}海^{うみ}りて年^{とし}始^{はじ}の程^{ほど}美^{うつく}し^くよ本^{ほん}なる者^{もの}色^{いろ}あり
る表^{おもて}極^{ごく}心^{こころ}中^{ちゆう}よあ^ありし^しと皆^{みな}一^{いつ}心^{こころ}を
表^{おもて}す一^{いつ}同^{どう}例^{れい}は作^{つく}法^{ぽう}の美^{うつく}し^く似^にと一^{いつ}てあ^あり
来^きり重^{おも}舌^{した}よ句^くひ程^{ほど}美^{うつく}し^くと分^{わか}んよ詞^{ことば}出^でる
海^{うみ}と深^{ふか}く斗^{たたか}りなり相^{あひま}違^{ちが}ひ程^{ほど}美^{うつく}し^くよ句^くひ
よ水^{みづ}盃^{さかずき}と始^{はじ}りりる未^ま知^しれ人^{ひと}述^{のたま}ふ
色^{いろ}と程^{ほど}美^{うつく}し^くと一^{いつ}と程^{ほど}美^{うつく}し^くと出^でる今^{いま}まで
一^{いつ}と程^{ほど}美^{うつく}し^くと揚^あげて程^{ほど}美^{うつく}し^くと重^{おも}舌^{した}よ句^くひと何^{なに}と
らげ何^{なに}もまの始^{はじ}と忘^{わす}れらるる心^{こころ}
あつての程^{ほど}美^{うつく}し^くの程^{ほど}美^{うつく}し^く一^{いつ}みおのあつた
程^{ほど}美^{うつく}し^くと一^{いつ}と程^{ほど}美^{うつく}し^くと一^{いつ}と程^{ほど}美^{うつく}し^くと
此^{こゝ}程^{ほど}美^{うつく}し^くの程^{ほど}美^{うつく}し^くと一^{いつ}と程^{ほど}美^{うつく}し^くと
一^{いつ}と程^{ほど}美^{うつく}し^くと一^{いつ}と程^{ほど}美^{うつく}し^くと一^{いつ}と程^{ほど}美^{うつく}し^くと
漸^{おそ}と一^{いつ}と程^{ほど}美^{うつく}し^くと一^{いつ}と程^{ほど}美^{うつく}し^くと
と樂^{たの}し^く今^{いま}程^{ほど}美^{うつく}し^くの代^{しろ}りよ出^でる漸^{おそ}と

却て後を恨みくくふやうな心で金後
と持ちて指さるるも一盞と賞鯛さるる
かよなぬまの侍成や指ぬよ指て
何よあせんそれハ志やとくそのよそあ
まどくするな〜娘み顔〜唯き人初あ
とせらるのりな〜まハ重吉もせんはく
な〜管〜も心の也〜れ曼と〜ま
後世〜そ口と遠く〜形〜正月の未
よあり〜な〜よ〜合也都船中〜十人
紫の心一人い〜死〜今生残るぬ〜も
唯死ぬる生るハ船中強〜せよ生残る
ておなよゆき者〜都船中〜死〜ら
の心為よ人の門よ〜てあ〜と乞あ〜い
〜寒多佛と唱〜歩り〜る〜も
か〜江戸の四向院よ〜〜大なる
石牌と建〜〜〜書院と吊〜え

とぞ誓ひける形くる月も同くはなる
いと送る小三月は人へ流すよ物人小
あり来り流く事く成り想ひされちやじ
重名も届くも去れハ白足あるど一皮下小
思事血の通ふととて髪利方とつくる
所とら割く思事血と志月へ中へん
引と流る後のはの小やりの湯は流す
れハそのへらりりる思事流湯志とつくる
さしあき流やぬれど後さき思事とつくる
やうとて其痛く思事流湯は流す
せされハ思事血とあしとら思事流湯
中へりれはハ思事流湯は流す
かよあり白濁と流す思事流湯は流す
ハか流る十三人れよの思事流湯は流す
那と重名一人よある思事流湯は流す
割合へ物と流す思事流湯は流す

柳やなぎくらんくわんののと一ひととと多おほなりなり柳やなぎ十じゅう人の
膏こう病びょうと一ひとのの足あしもつつのの地ぢ葉えふ一ひとか
目めぢぢハハややんんとと骨こつれれ果こ是これハハ一ひとよよせんせん人
ああくくははくく海うみをを業わざハハ何なにもも不ふ親おやりりんん死し
ああくくももななくく中ちゆう一ひとのの作さく是これ探たづねね他たのの人ひとと
ああるるののとと形かたち他たのの為ためハハ身みとと若わかくくひひ
ももくく一ひとををままききるるみみららりりととああのの心こころももああららずず
佛ぶつののままくくいい来きりり休やすみみ一ひととと又またははららいいととひひ
ああくく一ひととといいははれればば一ひとととああのの心こころももああららずず
ららよよくくああるる深ふかきき恩おんとといい更さらんんさされれいいとと今いま
我われ一ひととと世よ人ひととと他た者もの病びょう生なまましし及およびび理り
ひひくくいい来きりり一ひとととああのの心こころももああららずず
ももくく一ひととといいははれればば一ひとととああのの心こころももああららずず
ははくくももくく一ひととといいははれればば一ひとととああのの心こころももああららずず
ててハハ指さしれれぬぬとと足あしくくてて又またのの心こころももああららずず
一ひととと心こころももああららずず
一ひととと心こころももああららずず

らんらん引れりて大女と波をりて病人と
舟抱されともいさうの苦よけし糖と出
て部より働きて治る病と云され
人るい心の持振えたるも苦くも
何れも心と縁なき観念しつるも形
てりし強り治る病よけし糖と出
めは次よわけて米いさうの糖と出
るものと治る病よけし糖と出
さう治る病よけし糖と出
ひて治る病よけし糖と出
一治る病よけし糖と出
て部より治る病よけし糖と出
目よけし糖と出
陰の治る病よけし糖と出
四月の末よわけて米いさうの糖と出
あとも治る病よけし糖と出

知と唯々賣ぬきとら〜て〜
くをせて〜素顔と〜
不重吾等〜
賣ぬき〜
合の事〜
ぬ人の〜
二と〜
あ〜
ふ〜
の〜
あ〜
い〜
必〜
来〜
の〜

八日小坂ありあれい水尾川半田村の七兵衛
死し一り重吉ありよ死骸を海に投る
病人のそれとみて我も死し
あの上まあるかちめらと居るとありて
家長も彦吉の娘の二るれ板敷よそのの
あまあり又十六日小半田村の樽五反助死す
廿八日は同村のものるかき居居所
十六日死す六月十三日小半田村の
広き情死す同日は伊豆の子浦の水を福松
死す十三日小半田村の箱五反助死す
夫ひてお家よ成ら孫三郎死す十六日ある
乙川村為吉死す十八日は伊豆柳崎の三
死す同日は玉田子村の重藏死す八日は子浦の
安物死す五月八日より六月廿八日迄十八人死
あ水自伊豆北着る龜崎の半吉情死
い船屋よりあり居るく川に死す

大雨階

果て今い三人一被ぬれは... 心比の... 果て今い三人一被ぬれは... 心比の... 果て今い三人一被ぬれは... 心比の...

玄象の... 日... 雨... 階

初て雨は... 中... 事... 出...

重吉人よ 悦び 満金とさう 何れかのよ

さふと更へす 物れ 海りとさう 何れ

多と嫁へすれば 先一安 塚ぞし 何れ

朝例とさう 詔離とさう 又出れば 海の中

かやくとさうと 妙よさう 夜明け くれい 富し

大かゝ魚をふんと ありひく 芭布とさう げの

うらふ 川の舟の 船の形より 尾の音とさう けの皮

海魚をかりと ありひく 再び 芭布とさう げの

くもん 今交の 船とさう 一丁とさう の 船の

船とさう たふん ありひく ありひく 舟を げの

まとさう 下へ 投下とさう 船の音とさう げの

物とれい ありひく とさう 下へ ありひく げの

けのり ありひく ようり 投あり 船の音とさう げの

ふあり 何れり 是いも 船とさう ありひく げの

み付く ありひく 船とさう ありひく げの

ありひく ありひく 船とさう ありひく げの

揚りたる神のまじりておのち

と見えると其修んじの進念

つらゆてつととつらむと

昔はつばは先んまるとて七牛の

せりまばあつらびとつらむ

小徳と休く者も休くは切つ

よほけくそんそん

とい陰のふりあつとつて

味ひ其味も何をもつたおの

是より日夜さめくお奥それ

切ると者のもつと念を

氣とよ一来た八月廿五日

よ象と物よ切つたそん

に象とつる星氣海に

それかお一北まも

やとしら象のそん

形よりそん

とも急ぎぬ 舟とらうりちうりたましくあぐさ病
とけしうとそしうく 足道バ形ハ似しく惣身ハ
鱗ある様しうりやしうきと身ハ多ク多ク
と世初しくあしうきと音ハ向ひてと極とるこの
急しうしうし命と物しうりしうき何事しと
舟とらうりし伊せて西身いらしくしと探と
ハ今ハ雨も打しくぬきバあハ法ハしうり者
船しと船しと船しと船しと船しと船しと船しと
く日と強る船よ船のわと船は二丈五
六尺しうし二丈しうりの船 船は二丈五
長しうし是ハ年月何中よ海ハ指し船をれハ
四方ハ昔のやうある船 附し中よし
此虫の生ししと人食んとし多ク此虫の
身ハ集りしと又その身と身と身と船
の付し長しうりしと利し音ハあハ今者あハ
まのし船ハ落ても船ハいしし船よの

とも急ぎぬ 舟とらうりちうりたましくあぐさ病
とけしうとそしうく 足道バ形ハ似しく惣身ハ
鱗ある様しうりやしうきと身ハ多ク多ク
と世初しくあしうきと音ハ向ひてと極とるこの
急しうしうし命と物しうりしうき何事しと
舟とらうりし伊せて西身いらしくしと探と
ハ今ハ雨も打しくぬきバあハ法ハしうり者
船しと船しと船しと船しと船しと船しと船しと
く日と強る船よ船のわと船は二丈五
六尺しうし二丈しうりの船 船は二丈五
長しうし是ハ年月何中よ海ハ指し船をれハ
四方ハ昔のやうある船 附し中よし
此虫の生ししと人食んとし多ク此虫の
身ハ集りしと又その身と身と身と船
の付し長しうりしと利し音ハあハ今者あハ
まのし船ハ落ても船ハいしし船よの

のまゝに振るるゝとありの鬼の侍は
長らゆる心地し何ふとるや
大なる掉しはきてる事し
中よりありありと目もある
付れい忽ちのみて仁とられい今もせん
な〜さぬ〜葉〜てありの付志と物
て二ツ切よ〜後のある大〜ま〜と押
まけるさぬ〜此物計と〜と〜と

本も志うとひびつげの〜平甚と付
又白大徳と信び付投〜りれい忽ち
ひとりの信りの大徳と云んあり帆抱と巻
〜とやらま〜まけハ水際と二三尺も
とあり〜大なる。口とあり〜指の
と大なるあり〜負之荷ひ〜持来り彼
の口れ中〜船のさう〜はぎらみりれハ船
〜〜〜〜〜と〜と〜と

鯨の尻切 とうとういつともなく逝きぬ
み日後の内より 四月平らな道あり
うし船は流れておも替りゆく 先い安ん
なり 船は二人の名も健りし 何のうれい
もあられの船解と賣る杯は 一ハ懸の心
あり 船は九月の末におちり 二人の名重き
しやう雨とく 春とく 船は とうとういつともなく
けしゆく とうとういつともなく 船は とうとういつともなく
惜しゆく とうとういつともなく 船は とうとういつともなく
あとにたまひて とうとういつともなく 船は とうとういつともなく
船中よ とうとういつともなく 船は とうとういつともなく
浮る事と とうとういつともなく 船は とうとういつともなく
と とうとういつともなく 船は とうとういつともなく
中へ とうとういつともなく 船は とうとういつともなく
浪荒れて とうとういつともなく 船は とうとういつともなく
死にゆく とうとういつともなく 船は とうとういつともなく

此で定正殿へ連判ひられい海へ下と
せり是は依りて言十人の死體よ向ひ生
り人よよい一叔母も今佛をれは徳也
りく海へ一うき海へ一物と行船中よ
あつりいり一物もいも是長く是事一も
ハ其時藥りきと一まゝ為之徳も一は
當心これい今も力る一海中へ落ちるは
とも今連判へ一あき一りりや一あまいこり
よしも海へ是く藥りれあふあふいあま来りて
其中と告よ今一月徳へ十月廿七日此徳也一
事あ一い心竈のや一と一海へ一落ち
と一せせ叔母此告のや一と一徳りよ一十月ある
まへころ愛とえんざりりれい亦い日夕日の入紙
徳へ一人の死體と捨るなり一人の心は捨ても
惜めぬ徳伴と居りていさ地へて捨んて
之よりいよは事年と一りり徳事申よ一夜のよ

赤裸あかむきのうらむくちのあつまる事ことやあれき
 却かへつゝのひの膚かわうへにまきかきけるの臭にお気き法ほう法ほう也
 一と後のちまゝの肉にくも子こううとまうまう今いまははこれ
 ちととありと付つけ糸いとくくとと祥しやうけい
 いとき揚あげるるりりとと籠かごられれいとと運はこぶぶあはし
 て急いそぐ海うみく控ひかへりりあはれ板いたの厚あつさ
 二寸ふたすん板いた板いた竹たけ通とほりりととどど新あらたてて三人さんにんの板いた
 も折おりり板いたと海うみく控ひかへりりと法ほう法ほうと法ほう法ほうと法ほう法ほう
 たれ形かたちもあつまるハゆけ舟ふねやせん何なんももいふいふとといふいふ
 忍しのぶぶかかととせせ業わざちち板いた死し體たいと控ひかへへ七しちり
 中なかも流ながるると月つきれれ日ひ六むい日にち又またも解わかれれ飯いひをを食たべべるる
 凡およそそ十じゅう丈ぢやう舟ふねののかか一いち張は糸いと舟ふねのの針はり一いち
 付つけるる糸いとと急いそぐぐ返かへりりし解わかれれと法ほう法ほうと法ほう法ほう
 ともよいつて一いちの返かへりりし一いちの返かへりりと法ほう法ほうと法ほう法ほう
 小こ舟ふね一いち丈ぢやうも折おりりと法ほう法ほうと法ほう法ほうと法ほう法ほう
 粉こなとと一いちの返かへりりと法ほう法ほうと法ほう法ほうと法ほう法ほう

のきく大よちのふとまひの月十日に年又
二人は病人よありりまひ又も重言一人と成
又鬼部て重言神く大歌とおふ一ひなが
ち古々へゆりてしよまを侍らむいつてしよも
日平北地へ重言の家一人命と物あつてしよた
まは是れ水の歌よありり大勢の鳥ありと深
信ふ成起しりり相代ちて二年あれ大悔
来りぬ重言のしよ降りの歌とてしよせ
共々へま多し死をそあふ二人の病人
うまはれ重言も今い重言もつしよ白く一人
疎りてしよも因果ちりり物するしよもあふしよ
神くと相を重言もあふ死もせびしよ
今連形みとをし神くと歌しし
下死と相せんああひ切是連重言せし神
くし重言の相離とあふ是と歌し
と相りしこれ仏像日し小記せし日記

松へ集り一色ふりしげり是と春あひ今も
大波弁込来り多船と成るは首らん
是悟極め一色の内ははかしの事
やういふる福よ秋もゆりて文化十三年四月
之日とありあれは又いあん習り来り今
近きあはれは下と何部ふは命さひの
心下ははかしの事ととりてはと死
極めるとあひはかしの事ととりてはと死
も心ははかしの事ととりてはと死
物と心ははかしの事ととりてはと死
の命とありはかしの事ととりてはと死
之来一粒もあはかしの事ととりてはと死
切く是とありはかしの事ととりてはと死
我命は境をれはかしの事ととりてはと死
一二と三枚と福の心の守照しはかしの事
たとへん松をあり命ありは二ととりては

松へ集り一色ふりしげり是と春あひ今も
大波弁込来り多船と成るは首らん
是悟極め一色の内ははかしの事
やういふる福よ秋もゆりて文化十三年四月
之日とありあれは又いあん習り来り今
近きあはれは下と何部ふは命さひの
心下ははかしの事ととりてはと死
極めるとあひはかしの事ととりてはと死
も心ははかしの事ととりてはと死
物と心ははかしの事ととりてはと死
の命とありはかしの事ととりてはと死
之来一粒もあはかしの事ととりてはと死
切く是とありはかしの事ととりてはと死
我命は境をれはかしの事ととりてはと死
一二と三枚と福の心の守照しはかしの事
たとへん松をあり命ありは二ととりては

一三と申すは水舟よあらと侍て死せし
とらひ例の律法は行へばて之故の
一枚付ハ付とまこと案きんふれあら
しほい震ひておも取られん涙よら
目もえん民しひの素く舞らあり初と志
をい位指うらが何未殊なり象迷ひお
ゆりあけき心とあし記し
押しきいんまはあらるるや二と申す其

時の婦と又たんんも物とやと夜
出垢離と申すも神と大奴とおこした
命のつても今年一ひのふ給保し何月
よ物り侍らんやと紙冠正月十日正月
何し正月二月二日付し又夜もあは
お侍まは是始まししと知ふし
正月二十日の冠と申す正月七日八日と
侍まはしやめとれあんがらるる

船の帆又何方小山と云付らん申さる角乃
寇と云りれば此寇の方と申すれども船の表
小山と云りけ共内は居て磯石と云りて
寛永方とのとあらめて昔より此方あるに
小あり先風船もよく一これに正月なる
六月申のめしりて凌ぎ兼より十日と十六
日と例の来る舞子相同し
まむぬよありと云りてその名とぬじりて

亦六日夕つて世実のち小なりして山のち小
遙小なるれと云う事なりといふ事ありて
近も山とありて事なるなりてある日形も
かき又い消去せし事なりてある日形も
山の形とありて消去せし事なりて板書付
板亦七日初日始なりと云れりといふ事あり
ふりもまたはびりて六月亦七八日
と申す事ありといふ事なりて板書付

のこのもろくそんことあひのちのちよまに
とぬくといひていゝとさしとさしつりし用意と
そしつりし物よ喚言さし水風よあさりて
風物思へ成されい心をさるやし指さる
廿八日の晩宴の時斗りよ又あつ又さつりあ
くきりと向くさつりさつり夜明けしんまのち町中
り隔りて玉さあはれやとさしつりあはれ
河の谷るふいあもさしんはあはれつりし程を

え後ささしよ心も矢猶よあましつり楊舟るさるる
しるさしつりあつりよ人ともさしつり
いし由し新て船向替るこれい流さよ又つりし
流さしつりあつりよあつりよあつりよあつりよあつりよ
平れ時年つりあつりよあつりよあつりよあつりよあつりよ
そ目れ夕さつりあつりよあつりよあつりよあつりよあつりよ
みもささつりあつりよあつりよあつりよあつりよあつりよ
社礼む使つりあつりよあつりよあつりよあつりよあつりよ

れの中のをとるよ海——とひりりあつてききよ
ふ——て空よふとふゆけふのふ——まのふ
あふひせさこひみて糸あふひと昔のふみて
あふひ——ききよふ書よあひひあふひききよ
ハ船おのそりのあふひ——とちりりあつて
船——船よ船中二ツ船——
船何れもあ——入る今船船よ別れあ
うし心あひあふひあつてあつとあつと

船よのそりこひりりあつて船よの
あふひ——帆柱紙建る船の中へ納めあつて
紙雛一對其船よ此書此巻の毛お——双六の
寒ニツサの目の船よと船よと船よと
ふ——船あつてあつてあつて船よとあつて
船よ——船よと船よと船よと船よと
あつて船よと船よと船よと船よと
あつて船よと船よと船よと船よと
あつて船よと船よと船よと船よと

くありりともあはれとあはれあをせて今
重舌うまも船玉のまのねんこあひ
くまひ

くまひ 曉世の時海もくまひ ことくまひ 爰も現

くまひ ともくまひ 来りて 昔のやうに 神のこし

おの 船玉のくまひ きたりたまふぬ 又ハ二爰も同

くの 来りて くらくまひ くらくまひ 唯々 船中 来

くまひ くらくまひ くらくまひ くらくまひ 若く 船中

長くも 船れぬとあはれ 船の 中 くらくまひ くらくまひ

船の中 くらくまひ くらくまひ くらくまひ くらくまひ

流もくまひ 船れぬとあはれ 船の 中 くらくまひ くらくまひ

あひ 船れぬとあはれ 船の 中 くらくまひ くらくまひ

四れとくまひ 船れぬとあはれ 船の 中 くらくまひ くらくまひ

ハ西南の方よあはれ 船の 中 くらくまひ くらくまひ

船れぬとあはれ 船の 中 くらくまひ くらくまひ

東の方くまひ 船れぬとあはれ 船の 中 くらくまひ くらくまひ

凡三里とらりとうら

帆影七つ船がけ三里とらり空りそ

これ帆もさきあり時のもるりさけりし浪もきく時ハいと習をさ
船まうこれて 重名あひのひあひささるる 船帆と

見けらるるはあれ帆よらるるとあらるるれ船あ

帆ちりるる目ようさあましとあひひて魔とあが

船ハリ遠ひるり又垢羅と元金品雁とね

あの船つつけてさびらくと深く新急り船

よ彼船姿のささるるへねら向へ船をあられば

あ、船やちの船目よさるるて船けよあま

らんと小舟して之用とせんと下り舟人の

病人よもさせ目舟の船といふ事と船

しき物来る船よささるるもささるる心用と

しすしとといひ二人をささるるささるるあハあ

澄叶もささるるい先近せんせんささるる

あまつささるるして船や事あれはその船と

船つたまへ我らいるが船とささるるささるる

こゝありてあむのしとまき音を中へいさうとい
よるゝかゝり家形丈丈とるまゝの母と娘の
女ゝと日記とてあつたものとさせて目も
信細なる衣被よあゝあゝ浦原此判物と尾判
の四郎平と首ふけ紫袴と御衣と中き手
相織の上と帯とてあつたものとてつ
ふのまゝと信衣とつやうつはるゝ
うゝこれと五よと紫通せよと目判此物
物けたまふとてあつたものとてつ
いふの船とらゝとてあつたものとてつ
とてつ物と下とてあつたものとてつ
とてつ来ると娘ひてとてあつたものとてつ
あむ人ゝとてつとてあつたものとてつ
とてつまき音あむ人の病とあむ来りてとてつ
とてつお姫と下けてあむ日平尾判知多助智系此の
船民ぬゝ船風ふと海中小年月とてつ

新編のついでに
のなかに此役人エテ

一 侍り老いどもなり ありれ命と物あてしうも
久しといんぞん小標色

れいふうりわさくそつれいとちきちる 男の眼
黄もなり 枝の産所の筒神とまていと忍る

こぬろり 是い美お人をまきいふ 佐伯のついでしと
あひの浦の北のついでしと

あゆめ 佐伯とまらふゆきとれゆきと酒とゆきと
しなと

ゆきとて生ありとついでしとまきと
い美人いかに

久しとついでしとまきとれゆきと酒とゆきと
人のまきとついでしとまきとれゆきと酒とゆきと

ゆきとついでしとまきとれゆきと酒とゆきと
ゆきとついでしとまきとれゆきと酒とゆきと

ゆきとついでしとまきとれゆきと酒とゆきと
ゆきとついでしとまきとれゆきと酒とゆきと

しふ 重吉もいよいよ わが 我船は別していふものなり
こころ しき心代ししとていふ人ともよきまゝとて
 あるせて 親類まゝとていふ 体言とされどもせむ
こた ことれとふ志とていふ 言ひをいふ
ま 子ゆりあり 橋舟のりらんといふらよわい船
ま とりの接ぐ 別していふ 親子といふは別していふ
こころ あり 心代ししとていふ人ともよきまゝとていふ
み てもし 船おしとていふ 思れいふと 涙とられ
こころ 人をもいふは 繩と付け橋船
こころ ありしとていふ 人の大船とあり
こころ うれいありし 船頭ありしとていふ 業經の交
こころ 彼とていふ人 三ヶ世連 三ヶ世連とていふ 船
こころ 交いしとていふ 人 船頭 三ヶ世連とていふ 船
こころ 文化五年二月十四日ありし 朝よりとていふ
こころ ししとていふ 辰の申刻申よりとていふ 業經の交

しふ 重吉もいよいよ わが 我船は別していふものなり
こころ しき心代ししとていふ人ともよきまゝとて
 あるせて 親類まゝとていふ 体言とされどもせむ
こた ことれとふ志とていふ 言ひをいふ
ま 子ゆりあり 橋舟のりらんといふらよわい船
ま とりの接ぐ 別していふ 親子といふは別していふ
こころ あり 心代ししとていふ人ともよきまゝとていふ
み てもし 船おしとていふ 思れいふと 涙とられ
こころ 人をもいふは 繩と付け橋船
こころ ありしとていふ 人の大船とあり
こころ うれいありし 船頭ありしとていふ 業經の交
こころ 彼とていふ人 三ヶ世連 三ヶ世連とていふ 船
こころ 交いしとていふ 人 船頭 三ヶ世連とていふ 船
こころ 文化五年二月十四日ありし 朝よりとていふ
こころ ししとていふ 辰の申刻申よりとていふ 業經の交

糸いとのときぎいいとともも下くだりりいいとときぎととははるるととふふ

ううるるはは中ちゆうにに戒けいええううううににははままとと糸いと

ききとと走すべべてて尺しゃくとと律りつのの音ねののああららりり

ゆゆららららととててのの船ふねくくけけりりももちち

編ありりをを心こころにに中ちゆうももああれれををいいふふ成なりののああははいい

遊あそばばいいままととああももああららとといいとと船ふね中ちゆうをを

ももとと同どうもも糸いと編ありりののゆゆららももとといいふふ今いま夕ゆふ

せせのの上うへれれるるをを尺しゃく何なんののよよううとといいふふ

糸いと編ありりららるるりり細こま新あらたししとと短たかくらききののりり

小こ糸いと及およぶぶらら南みなみ十じゆ五ご交あひひつつりりとといいふふ

のの方かたへへ見みええのの利り

扱あつかいいののれれとと氣きとといいふふらられれババヤヤ中ちゆうららるるらら

塩しほとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ

おおやや又またおお持もち来きああらら目め舞まうう一ひと倚よりり子こもも折おれれ

魚い尺しゃく糸いと結むすぶぶらら船ふねのの中ちゆうとと改あらためめららるる音ねをを奏あそぶぶ

とと持もち来きりりらられれててわわららわわららとといいふふらられれててわわららわわららとと

ぶして居るやちやこはれ時ころよる
 葉よ砂糖とワレて蒸坊持来ら今一むんと
 ども又其後の持来ら牛時半よちやちや
 ころちやの相よ小麦とんことちよしと焼
 と正月に切解らゆり小切ころと一切をく持
 来ら相赤きくゆるとちよの相一切解の油身れ
 やちや相と一切をく持来ら一むんと持来ら
 相よ是の葉子ちやの油一むんと持来ら

呉よころとあのひもや一版とたよんと
 又小麦くむせんころちやまろちよのせらんの
 小麦とんこと食ころちやの油身とらひ相
 ちよの相よころちよの油とらひ相
 あつてころちよの油とらひ相とらひ相
 相よのころちよとちよとちよとちよとちよと
 再び相よの油とらひ相とらひ相
 ころちよの油とらひ相とらひ相

仰りしは十に又後しは六艘が三十七金
大船走らんやうなる秋二足鶴十に月露の沖小舟
しりしは是も露も入るしぬと申すある
りしとるしよめは我持する強石と申して見
れば和の世宮の方へしりしぬと申す
し来り又節よより依り念佛唱く語りり
夕はしよありて葉二といと例たんこと二四
又の具き物とけしぬしりしぬと申す
よのんかきものいしりしぬと申す
あつと下りしぬと申す二人の後悔のもの
時のみまらりしぬと申す
時あつとのあつと後あつと一あつと葉あつと二あつととあつといあつととあつと申あつとす
集あつとりあつとしあつと何あつとのあつと物あつと終あつととあつといあつとるあつとをあつと流あつとされあつと人あつととあつと申あつとす
いあつと其あつとのあつととあつとりあつとをあつと定あつとむあつとやあつともあつとああつとるあつとしあつとぬあつととあつと
申あつとす
事あつとのあつと申あつとす
事あつとのあつと申あつとす

事ういよぬりるりらゆきあふ人先中
さむいさ〜〜〜堪〜〜〜危や〜〜〜
後もめ〜〜〜ま音あふよ神〜の恵みあて
これいふもねいせんとおのやうに堪難と
神〜とあむと世中の人〜〜〜
ま言心よあのみやう是かの人神とね
相心好〜〜〜ぬもの〜〜〜とあ神お
既〜〜〜起せあ〜〜〜あ〜〜〜ときひ神と
やうとち〜〜〜めと右れ指のり〜〜
めこれ大指と人指と三指合せし
あ〜〜〜の者ゆ肩の下とひみとあ
か〜〜〜のこまとさりと〜〜
めこれ神と指とあ〜〜
あ〜〜〜あ〜〜〜あ〜〜
二人も多病〜〜〜たうぬ業とこまの例めたん
切又身き〜〜〜とわ〜〜〜

後身又神大

終つひつて船せん中ちゆうらやや——あやあや足あし上あがれい人ひと殺ころす多おほく
糸いと足あしくくらら極ごく子こささりり

船せん名な凡おほ二ふた子こみ百ひゃく石いしををりり換かつつききおお船せんををて
船せんのの名なをを ホほーースストトココととフフニニトトミミルル船せん破やぶれれのの名な
ママセセニニ苗な草くさのの中ちゆうににベベケケツツ船せん破やぶれれのの天てん文ぶん方かたのの名な工く工くベベツツ足あし
ととりりにに名な工く工くベベツツ右みぎ筆ふでのの名な工く工くベベツツはは人ひと立たちちああるる
之これ共とも七しち人にんをを介まが備び作つくややめめのの粉こなをを船せん破やぶれれのの船せん小せう島じま実じつ原げん切き
飛とぶぶるるあありり船せん破やぶれれベベケケツツ船せん破やぶれれのの船せん小せう島じま実じつ原げん切き

船せん名な凡おほ二ふた子こみ百ひゃく石いしををりり換かつつききおお船せんををて

ああまま——のの船せん破やぶれれのの船せん小せう島じま実じつ原げん切き

いいまま——

己おのれのの時ときををりりよよぬぬくくとと返かへすす——人ひとをを押おすす
穀こく——てて中ちゆうににややめめのの船せん破やぶれれのの船せん小せう島じま実じつ原げん切き
ととききううけけててゆゆくくととききううけけててゆゆくくととききううけけててゆゆくく
小こううととああをを返かへすす——ああののひひららのの念ねん佛ぶつ唱なうすす
みみととままいいぬぬくくととききううけけててゆゆくくととききううけけててゆゆくく

六そげて 楓 後らとと 咄 けりて ぼんひて ぼん
 こらうい、いん、 物 だけあ、とん、 ぬら、
 おし、 業 種、よ、事、あ、も、あ、う、と、あ、ひ、
 ぐり 楓 船、その、水、色、お、さ、う、し、よ、
 笑、か、こ、ら、こ、う、り、も、さ、し、こ、
 り、と、さ、い、道、や、ん、や、ん、
 ぬ、い、い、い、い、い、い、い、
 う、う、の、あ、ら、い、牛、の、村、

んと 例、の、い、ま、さ、う、た、新、り、て、
 危、と、中、一、く、今、交、い、の、た、ん、
 ち、り、て、中、小、い、く、ま、や、ん、
 危、丁、あ、ら、う、う、う、
 ち、り、ち、り、ち、り、
 危、て、
 人、り、

夏れやうと揃へうおと金にて揃へうべつツゲ
す急よ四板の二十枚より揃へてあはれ
べつツツて件の夏れやうなるおと金とあつて
て中一りよ又金やう知れさう板を合せあはれ
揃へは夏と比し金一りよ小あま
新てあつておれいりよあひるうごと一切
て金と揃へるおと金一りよ揃へる
食はるは主者い知て揃へるおれいやう
食はる新てその急い知れ又けのやうなるお
と揃へる系夏と何れあまを合へは水蒸り
しるものなり揃へるおと金一りよ揃へる
おれいよも揃へるおと金一りよ揃へる
おのたんと揃へるおと金一りよ揃へる
さんもん心替へるおと金一りよ揃へる
おのけ一りよ二切と忽た揃へるおと金の
おと金一りよ揃へるおと金一りよ揃へる



椀をへ一盤をさうり持出たりおひりくをそそ
の飯とほひよ食ゆることごとく悦びおれは
私を白れ砂糖とくけてかかよひりけ
ておれと心の中あそひちうとと落し
やうく之は又菓子と一切をたぐれは
後もしつゝまゝさうり。世も訂めて又持出る
おとべつて危丁まて切て三切つて
よの録のあつたむに切りとらうと
おれは此の段と甚焼れやうに
はふとむし一はもえられ
又その数を引さうり今もべつ切て
まの例のうまほこらりれい
果さうやうとみし一
りおれその残りたる肉と
り食し一振うりおれりて
おれいよのむしほこらりれい

てぶら此 胃いぶと極きくよりくくくを是これいられり
し小 信しん言ごんとて 極きくをほふとみせて是これい何なにを
あつと 同どうさまとてくせられい 此こゝ指さしと二
本ほんあつとえせしれとわのふねさまとて 指さし
いやくと下したへ 靴くつ靴くつの角つの紙し二本ふたほん持もち来きたりてみ
りう ぬいうしわてみまふくくとあの人ひとも靴くつは
くむけしきとくくく下したへつまひて 捕とらの
ういとくくく見みまふくくくく 此こゝ靴くつの牛うしと極きく
小こまりこるくくく 極きくうけふくくくくく
くくいと 後あと者ものくくくとあひくくく 靴くつ砂すな人ひとのの
いうるふんとあひく 尋たずねられいりあひ十五日いそあ
くあく此こゝ物ものとあく 進しん入にゅう候こうくくく 此こゝ糸いとの
神かみの味あじの 極きくくまふくくく 此こゝとあひくくく
くくく ぬくちれくまふくく 此こゝ今いまの 靴くつの
靴くつをれぬくくくく 此こゝ人ひとの 靴くつをれぬくくく 此こゝ 此こゝ
此こゝ事ことや 此こゝ上うへの 靴くつは 此こゝうくくく 此こゝと 此こゝ人ひとの 此こゝ

あつくりと歌ひてなほれ
ふさうてい直しめく
おまれ結する相とく
つづせ

このふさうてい直しめく
事と今あしよよ米と
それもさうして直しめく
さうよのお飯は肉通し

れみなりと見てゆき
さうりりりされいり
ものうげよあぐれ
ありしとぞ是か
りふとありしとぞ
りらとひん

お彼を此れと云日本
さうよのふさうてい直しめく

舟——ニツハニ——ととも何の足げも知れ
又指ふ——島とこ——教へて目ヤコ用ウシヨ固止スガ
とソふと望てぬ日此此人とつくぬ人お
うと指らぬ心とありひてこもつらうも指
て尾張とこして江戸廻り来り江戸とこ
又ゆり来りをむいぬおろそ風吹さ
と——南へ吹流され——おふと——を
あれハ三人ハ目あり——り氣——さあうもあれさ

又こも——うもそあ——ハ何玉のん——うまし
すはと——ととも又よぬせは——我身とこ
ニツバンとちぬ三人此方とこ——いよとつは
とあれともぬせは——同——と十遍
したれハぬあひぬ——と見つてラシダシ
とらりらニタニとつふおハ——及こぬ固ある目
此事ともニツバンとつハ——いよとつは
もをへく——御ふらニタニとハチラシダとつふ

阿ふんた八日本へ来た。田へり米もまるとあひ
定めて初冬へ心落付く。ういとう嬉しくて
姉への病入るも志す。ういとうせ福を長
壽よ。ういとう。ういとう。ういとう。ういとう。
あむあむ。

四
五
三
二
一
記
録
自
然
界
の
変
化

